http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/index.html　令和6年11月15日発行

中北.com

チュウホク ドット コム

地域教育情報紙

中北教育事務所
教育支援スタッフ
TEL 0551-23-3046
FAX 0551-23-3013

4

中北の地域社会（community）の心の交流（communication）をめざします

～第4号の見出し～

◆ 自分自身への挑戦 ～第96回 甲府第一高等学校 強行遠足～
◆ 金メダル文田選手 母校凱旋 生徒にエール ～韮崎工業高等学校 記念碑除幕式・報告会～
◆ 青春はつづくよ、どこまでも！ ～第38回勧学院祭～
◆ #中北バトン 甲斐市教育委員会 生涯学習文化課 青少年育成カウンセラー 長田 靖

自分自身への挑戦　～第96回 甲府第一高等学校 強行遠足～

甲府第一高校（飯島清樹校長）の強行遠足は、今年度でちょうど100年目を迎えます。10月5、6日の2日間、男子は、一高から長野県小諸城址懐古園までの104km、女子は、北杜市高根総合支所から長野県小海町総合センターまでの41.6kmの踏破に挑みました。

3年生男子のスタート！

生徒が強行遠足に挑戦することはもちろん大変なことなのですが、運営する先生方も大変だと感じました。事前の検印所設置手配や運営担当手配・分担等の緻密な計画と準備が、当日のスムーズな運営につながっていました。スタート地点からゴールまでの全コースを実際に歩いて確認してくれた先生、生徒が進みやすいように全コース上の歩道にはみ出した草を手分けして刈ってくれた先生など、生徒の安全のために万全を期して当日に臨まれた先生方には、職務を超えた生徒への愛情を感じました。

保護者による伝統のしじみ汁

さらには保護者と同窓会による拠点指導、巡視、給水所運営や、令和5年度卒業生による検印所運営、後尾追行係など、至る所で強行遠足を無事に行うための温かく力強い支援がありました。

OG・OBによる激励

一人一人の完走者にゴールテープ

特に「一高らしさ」を感じたのは、「まきば公園」地点での応援団吹奏楽部OG・OBと応援団OBによる激励です。生徒一人一人がこの地点を通過するのは長時間にわたります。その間、一人一人に対して、夜中も日中も必ず演奏・応援をしていました。疲れた様子を決して見せないその姿には強さ逞しさがあり、通過する生徒は、とても励まされたことと思います。

末松政樹PTA強行遠足委員長さんにお話をうかがいました。

「息子と関われる最後なので、とても感慨深い。（巡視中に）近くで話すこともできるし、頑張っている姿を直接見ることができるのはうれしい」

末松さんは、お子さんが1年生の頃から委員を務め、今年で3年目です。強行遠足実施について、「伝統があるからこそ続けていかなくてはならない。時代が変わっても、強行遠足のよさを見いだし、再確認したい」と、伝統のバトンを受け渡していく心境を話されました。

厳しい道のりを少しでも先へ進もうと、生徒が自らの限界を超えて歩み続ける姿に魂が震えた2日間でした。

【強行遠足の歴史と概要については、一高ホームページの学校紹介からご確認ください。】

金メダル文田選手 母校凱旋 生徒にエール

～韮崎工業高等学校 記念碑除幕式・報告会～

晴天の9月13日、パリオリンピック、レスリング男子グレコローマンスタイル60キロ級で金メダルを獲得した文田健一郎選手が、母校・韮崎工業高校（飯島慶一郎校長）を訪れ、記念碑除幕式および報告会に臨みました。

「2024 パリOlympic Games G-60kg 優勝」という文字が燦然と輝いています

はじめに、文田選手の功績を刻んだ記念碑の除幕式が行われました。吹奏楽部の生徒が演奏するファンファーレに合わせ、今回のパリオリンピックでの結果が追記された記念碑が姿を現すと、大きな拍手が起こりました。

次に、体育館で報告会が行われました。体育館中央にできた花道を、首に金メダルをかけた文田選手が歩いていきます。「王者の風格」を身にまとった文田選手を目前にし、体育館全体が高揚感に包まれました。

懸垂幕も披露されました

壇上に上がった文田選手は、後輩である在校生に向かい、まずこう語りかけました。

「4か月前、みなさんの前で、パリオリンピックで金メダルを取って報告に来ますという宣言をしました。今回その宣言通り、金メダルを持ってみんなの前で報告できることを本当にうれしく思っています」

レスリング部の生徒、父親でレスリング部顧問の敏郎さんと

そして続けて、次のように力強くエールを送りました。

「3年前に開催された東京オリンピックでは、決勝で敗れて銀メダルという結果でした。そこからの3年間は、本当に長い3年間だったなと実感しているんですけど、この3年という期間は、みんなが今過ごしている高校生活と同じ時間です。僕は、東京オリンピックからの3年間、たくさんの経験をして、何回も挫折して、でもそのたびに目標に向かって歩みを止めずに進み続けました。今はまだ実感が薄い人もいるかもしれませんが、この3年という期間はあっという間のようで、濃い時間を過ごそうと思えば本当にいろんなことができる期間です」

「僕自身、高校時代の3年間は、レスリングに本気で打ち込んで、たくさんの経験をして、その3年間というのが今につながっているなとすごく実感しています。何かに打ち込んで本気で取り組む3年間というのは、その後の人生、その後の自分自身を作っていきます」

「何か自分が大事にしているものとか自分がやっていて楽しいと思うこと、自分がこの先もずっと続けたいなと思っていることに対して全力で時間を作って、将来振り返った時に、あの高校時代の3年間、本当に有意義だったなって思えるようにしていってもらえたらと思います。僕自身、ここでレスリングをやめるつもりはまったくなく、これからもどんどんレスリング選手としての成長を続けていくつもりなので、みんなも共に頑張っていきましょう」

全校生徒を前にメッセージを送る文田選手

文田選手の言葉には、経験に裏付けられた重みと説得力があり、心にビシビシと突き刺さるような感覚がありました。勇気づけられたという生徒もきっと多くいたはずです。偉大な先輩のエールを胸に、それぞれの高校生活を充実させていってほしいと切に願います。

青春はつづくよ、どこまでも！ ～第38回勧学院祭～

10月15日、テーマ「勧学院祭　みんなの笑顔に　会いたくて」のもと、第38回勧学院祭が、YCC県民文化ホール小ホールにて開催されました。参加者は、合唱やダンス、朗読劇、太鼓など多彩なプログラムを、演じる側と観る側という両方の立場から、心ゆくまで楽しみました。印象的だったのは、参加者が、自分たちの舞台発表に全力を尽くすだけでなく、教室の垣根を越え、積極的に声をかけ合ったり、拍手を送り合ったりしていたことです。テーマの言葉通り、至るところで「みんなの笑顔」がはじけていました。

中北教室の1年生、2年生も、練習の成果を発揮し、会場を大いに盛り上げました。

♪魅せた！迫力の「南中ソーラン」

1年生は、ドラマ「3年B組金八先生」でおなじみ、毎年、小・中学校の運動会や体育祭でも盛んに取り上げられている「南中ソーラン」に挑戦しました。振り付けを覚えるためにラインで動画を共有したり、教室がある日の午後以外にも練習日を追加で設けたりするなど、限られた期間の中、できる限りの準備をし、本番に臨みました。本番は、「寿　中北」と銀色の文字で印刷されたオリジナル黒Tシャツの上に赤いハッピを羽織り、頭には赤ハチマキ、腕には黒サポーターと凛々しい姿で舞台に上がり、最後まで集中力の切れない、すばらしい演技を見せました。終了後、初参加の飯島達美さんに感想を聞くことができました。飯島さんは、開口一番、「来年もう1回やってみたい。13回間違えたのでもっとうまくできるようにしたい」と述べ、続けて「体力的なことよりも振り付けを覚えることが大変だった」、練習を重ねるうちに、「リズムに合わせて踊るのは楽しいと感じるようになった」と語りました。飯島さんのモットーは、「自ら楽しむ。一生懸命遊ぶ」ことだそうです。すでに来年を見据える前向きな言葉からも「自ら楽しむ」精神を感じることができました。

♪心を合わせた歌声と見せ場のダンスに拍手！

2年生は、懐かしのメロディーを合唱という形で披露しました。歌ったのは、ペギー葉山「学生時代」、ポーランド民謡「森へ行きましょう」、加山雄三「旅人よ」の3曲です。練習を積むごとに声がそろい、完成度が上がっていきました。その歌声からは、気持ちよく楽しく取り組んでいることがうかがえました。本番は、服装を、上は白、下は黒と揃えたうえで、おのおのが首に思い思いのスカーフを巻き、歌いました。色とりどりのスカーフが、明るいステージによく映え、一体感あふれる歌声とともに心に残りました。2曲目「森へ行きましょう」の後半では、歌声に合わせ、吉田幸四さんと三井日子さんがダンスをする場面がありました。2人が列を離れて踊りだすと、会場から歓声が上がり、最後の決めポーズには、拍手喝采が送られました。このダンスを提案し、組み立てたのは、20年近い社交ダンス歴を持つ吉田さんです。吉田さんは、「ダンスの練習は、（外部施設でのものも含め）5回くらい行った」、本番については、「間違ったら困ると思って緊張した。完璧とはいかない部分もあったが、やり終わって満足感、達成感がある」と晴れやかな表情で振り返りました。

サミュエル・ウルマンの詩に「青春とは、人生のある時期ではなく、心の持ち方をいう」という一節がありますが、それを目の当たりにしたようなひとときでした。

勧学院生のみなさん、本当に素敵でした。お疲れさまでした！

＃中北バトン　様々な立場から、子どもたちへの思い、地域への思いを語っていただきます。

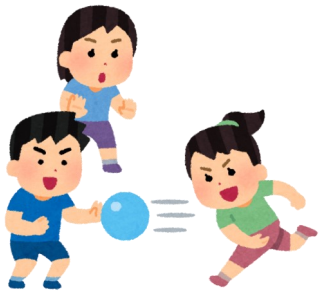
地域における青少年育成活動の活性化

甲斐市教育委員会　生涯学習文化課　青少年育成カウンセラー　　長田　靖

甲斐市敷島地区の青少年育成カウンセラーとして、月1回の教育相談のコーディネート、敷島地区子どもクラブ指導者協議会と青少年育成敷島地区民会議の事務局を担当して5年になります。

思い起こせば、事務引き継ぎで前任者から説明を受けた様々な事業について、その中止や延期を関係者に連絡することが最初の仕事でした。コロナ禍真っ只中の2020年のことです。

タイトルの「地域における青少年育成活動の活性化」は、所属する山梨県青少年育成カウンセラー会がここ数年取り組んでいる研究主題です。先日開催された研究協議会では、県下各地の実践（現状）を持ち寄って意見を交わすことができました。地域の特色に応じて工夫した取組は、とても参考になります。一方、考え方や生活の変化もあり、地域を巻き込んでいくことに苦労が大きいのも現実です。



さて、私の担当する敷島地区では、野外活動や軽スポーツ体験を軸にした年2回のジュニアリーダー研修、居住地区対抗を基本とするドッジボール大会、一泊で冬の高遠へ出かけるウインターキャンプなど、体験と子ども同士の交流を図る事業が継続され、各事業に毎回多くの子どもたちが参加します。

甲斐市の教育振興基本計画である「創甲斐教育」の基本理念は、‘甲斐市で育ち、甲斐市を育てる人づくり’です。今の自分の立場で何ができるか、自問の毎日ですが、地域の協力をいただきながら、がんばっていきたいものです。

「第2回中北地区地域教育推進連絡協議会」が以下の日程で行われます。

多数の方のご参加をお待ちしています。詳細は12月上旬にお知らせします。

日時　令和7年1月23日（木）14:10～16:30

場所　甲斐市敷島総合文化会館大ホール

内容

①地域団体の活動実践発表…「白根高校と南アルプス市の包括連携協定における、1年生総合的な探究の時間での地域の魅力調査活動」について

②研修会…演題　『主体性を伸ばす：子どもと大人の「育ち」と「学び」を支える心理学』

講師　山梨英和大学教授　佐柳　信男　氏（YBSテレビ「子育て日記」コメンテーター）

～紙面を飾ってみませんか～

地域教育情報紙『中北.com』は、年6回、奇数月に発行し、中北地区500か所以上に配付しています。学校や地域、諸団体での様々な取り組みをぜひ取材させてください。お問い合わせは下記まで、お気軽にお声がけください。

令和6年度『中北.com』No.4　編集・発行　中北教育事務所　担当　内藤 賢 ・ 望月亜由
〒407-0024 韮崎市本町4-2-4　電話　0551-23-3046　　FAX　0551-23-3013